

『小学校理科』 模擬授業課題

(1) 日 時 令和7年1月〇日 第2校時(45分)

(2) 場 所 5年1組教室

(3) 学年・学級 第5学年 1組(24名)

使用教科書 わくわく理科5(啓林館)

(4) 単 元 名 もののとけ方

(5) 指導する児童の状況

【既習事項】

- ・形が変わっても、ものの重さが変わらないことや、物質によって同じ体積であっても重さが異なることを学習している。
- ・温度計や電子天秤などを用いた観察・実験を行っている。
- ・観察・実験から得られた結果を適切に記録するなどの技能を身に付けている。

【単元の目標】

ものが水に溶ける量やようすに着目して、水の温度や量などの条件を制御しながら、ものの溶け方の規則性を調べる活動を通して、それらについての理解をはかり、実験などに関する技能を身につけるとともに、おもに予想や仮説をもとに、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知①ものが水に溶けても、水とものとを合わせた重さは変わらないことを理解している。 知②ものが水に溶ける量には、限度があることを理解している。 知③ものが水に溶ける量は水の温度や量、溶けるものによって違うこと、また、この性質を利用して、溶けているものを取り出すことができることを理解している。 知④ものの溶け方について、実験などの目的に応じて、器具や機器などを選択し、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。	思①ものの溶け方について、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 思②ものの溶け方について、実験などから得られた結果をもとに考察し、表現するなどして問題解決している。	態①ものの溶け方についての事物・現象に進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら問題解決しようとしている。 態②ものの溶け方について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

【児童の状況】

- ・全員が、日常生活で水にものを溶かす経験をしている。
- ・理科に興味・関心が高く、安全に配慮しながら、実験を行おうとする児童が多い。
- ・自然の事物・現象と既習の内容や生活経験を関係付けたり、自然の事物・現象の変化とそれに関わる要因を関係付けたりすることができる児童が7割いる。
- ・解決したい問題について、解決の方法を発想する際に、制御すべき要因と制御しない要因を区別しながら計画的に観察・実験などを行うことが考えられる児童が6割いる。
- ・予想と結果を関連付けながら、自分の考えを言葉で表現することに対して苦手意識をもっている児童が3割いる。

校種・教科等	小学校	受審番号	氏 名
--------	-----	------	-----

(6) 指導計画(全 15 時間)

次(時数)	学習内容	活動・指導形態	評価計画
第一次 (1時間)	・ものが水に「とける」とはどういうことなのか日常の場面から考える。 ・食塩の粒を水に入れて観察し、物の溶け方について問題を見いだす。 ・「とける」とはどういうことなのか考える。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
第二次 (9時間)	・水に溶けたものは、どうなったのか考える。仮説を基に実験方法を計画する。(P142～144) ・電子天秤の使用方法を確認する。 ・食塩とミョウバンのとかす前と後の重さを調べる。(実験1) ・食塩及びミョウバンをとかした液体を蒸発させて観察する。 ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水にとけたものは、目には見えなくなっても、とけた液の中にあることをまとめる。 ・決まった量の水に溶けるものの量には、限りがあるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・メスシリンダーの使用方法を知る。 ・決まった量の水にとける食塩やミョウバンの量を調べる。(実験2) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・決まった量の水にとけるものの量には、限りがあり、ものによってとける量はちがうことをまとめる。 ・水の量を増やすと、水に溶けるものの量はどのように変わるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・水の量ととけるものの量の関係を調べる。(実験3) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の量を増やすと、水にとけるものの量も増え、水の量が2倍になると、とけるものの量も2倍になることをまとめる。 ・水の温度を上げると、水に溶けるものの量はどのように変わるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・水の温度ととけるものの量の関係を調べる。(実験4) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の温度を変化させたとき、とける量の変化のしかたは、とかすものによってちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
		一斉・個別 ペア・グループ	○[思①] ○[態①]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思②] ○[知①]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知②]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
		一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
		一斉・個別 ペア・グループ	[思②] [知③]
第三次 (4時間)	・どうすれば水にとかしたものを取り出せるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・ろ過のしかたを知る。 ・水よう液を冷やしてとけているものを取り出せるか調べる。(実験5) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液は、冷やすとミョウバンを取り出すことができる。食塩水は、冷やしても食塩を取り出すことはできないことをまとめる。 ・水溶液から水を蒸発させると、溶けているものを取り出せるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・実験用ガスコンロの使用方法を確認する。 ・水よう液から水をじょう発させ、とけているものを取り出せるのか調べる。(実験6) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液も食塩水も、水をじょう発させると、とけていたものを取り出すことができることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
		一斉・個別 ペア・グループ	○[態①] [思②] [知③]
		一斉・個別 ペア・グループ	○[思①]
		一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
まとめ (1時間)	・単元を振り返り、学習したことをまとめる。 ・たしかめよう ・活用しよう ・くらしとリンク	一斉・個別 ペア・グループ	○[態②]

●面接終了後、メモ用紙とともにクリアファイルに入れて提出してください

『小学校理科』 模擬授業課題

(1) 日 時 令和7年1月〇日 第2校時(45分)

(2) 場 所 5年1組教室

(3) 学年・学級 第5学年 1組(24名)

使用教科書 わくわく理科5(啓林館)

(4) 単 元 名 もののとけ方

(5) 指導する児童の状況

【既習事項】

- ・形が変わっても、ものの重さが変わらないことや、物質によって同じ体積であっても重さが異なることを学習している。
- ・温度計や電子天秤などを用いた観察・実験を行っている。
- ・観察・実験から得られた結果を適切に記録するなどの技能を身に付けている。

【単元の目標】

ものが水に溶ける量やようすに着目して、水の温度や量などの条件を制御しながら、ものの溶け方の規則性を調べる活動を通して、それらについての理解をはかり、実験などに関する技能を身につけるとともに、おもに予想や仮説をもとに、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知①ものが水に溶けても、水とものとを合わせた重さは変わらないことを理解している。 知②ものが水に溶ける量には、限度があることを理解している。 知③ものが水に溶ける量は水の温度や量、溶けるものによって違うこと、また、この性質を利用して、溶けているものを取り出すことができることを理解している。 知④ものの溶け方について、実験などの目的に応じて、器具や機器などを選択し、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。	思①ものの溶け方について、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 思②ものの溶け方について、実験などから得られた結果をもとに考察し、表現するなどして問題解決している。	態①ものの溶け方についての事物・現象に進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら問題解決しようとしている。 態②ものの溶け方について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

【児童の状況】

- ・全員が、日常生活で水にものを溶かす経験をしている。
- ・理科に興味・関心が高く、安全に配慮しながら、実験を行おうとする児童が多い。
- ・自然の事物・現象と既習の内容や生活経験を関係付けたり、自然の事物・現象の変化とそれに関わる要因を関係付けたりすることができる児童が7割いる。
- ・解決したい問題について、解決の方法を発想する際に、制御すべき要因と制御しない要因を区別しながら計画的に観察・実験などを行うことが考えられる児童が6割いる。
- ・予想と結果を関連付けながら、自分の考えを言葉で表現することに対して苦手意識をもっている児童が3割いる。

校種・教科等	小学校	受審番号		氏 名	
--------	-----	------	--	-----	--

(6) 指導計画(全 15 時間)

次(時数)	学習内容	活動・指導形態	評価計画
第一次 (1時間)	・ものが水に「とける」とはどういうことなのか日常の場面から考える。 ・食塩の粒を水に入れて観察し、物の溶け方について問題を見いだす。 ・「とける」とはどういうことなのか考える。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
第二次 (9時間)	・水に溶けたものは、どうなったのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・電子天秤の使い方を確認する。 ・食塩とミョウバンのとかす前と後の重さを調べる。(実験1) ・食塩及びミョウバンをとかした液体を蒸発させて観察する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①] [態①]
	・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水にとけたものは、目には見えなくなっても、とけた液の中にあることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] ○[知①]
	・決まった量の水に溶けるものの量には、限りがあるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・メスシリンダーの使い方を知る。 (P145～146)	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・決まった量の水にとける食塩やミョウバンの量を調べる。(実験2) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・決まった量の水にとけるものの量には、限りがあり、ものによってとける量はちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知②]
	・水の量を増やすと、水に溶けるものの量はどのように変わるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・水の量ととけるものの量の関係を調べる。(実験3) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の量を増やすと、水にとけるものの量も増え、水の量が2倍になると、とけるものの量も2倍になることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
	・水の温度を上げると、水に溶けるものの量はどのように変わるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・水の温度ととけるものの量の関係を調べる。(実験4) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の温度を変化させたとき、とける量の変化のしかたは、とかすものによってちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] [知③]
第三次 (4時間)	・どうすれば水にとかしたものを取り出せるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・ろ過のしかたを知る。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・水よう液を冷やしてとけているものを取り出せるか調べる。(実験5) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液は、冷やすとミョウバンを取り出すことができる。食塩水は、冷やしても食塩を取り出すことはできないことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[態①] [思②] [知③]
	・水溶液から水を蒸発させると、溶けているものを取り出せるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・実験用ガスコンロの使い方を確認する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①]
	・水よう液から水をじょう発させ、とけているものを取り出せるのか調べる。(実験6) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液も食塩水も、水をじょう発させると、とけていたものを取り出すことができることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
まとめ (1時間)	・単元を振り返り、学習したことをまとめる。 ・たしかめよう ・活用しよう ・くらしとリンク	一斉・個別 ペア・グループ	○[態②]

●面接終了後、メモ用紙とともにクリアファイルに入れて提出してください。

『小学校理科』 模擬授業課題

(1) 日 時 令和7年1月〇日 第2校時(45分)

(2) 場 所 5年1組教室

(3) 学年・学級 第5学年 1組(24名)

使用教科書 わくわく理科5(啓林館)

(4) 単 元 名 もののとけ方

(5) 指導する児童の状況

【既習事項】

- ・形が変わっても、ものの重さが変わらないことや、物質によって同じ体積であっても重さが異なることを学習している。
- ・温度計や電子天秤などを用いた観察・実験を行っている。
- ・観察・実験から得られた結果を適切に記録するなどの技能を身に付けている。

【単元の目標】

ものが水に溶ける量やようすに着目して、水の温度や量などの条件を制御しながら、ものの溶け方の規則性を調べる活動を通して、それらについての理解をはかり、実験などに関する技能を身につけるとともに、おもに予想や仮説をもとに、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知①ものが水に溶けても、水とものを合わせた重さは変わらないことを理解している。 知②ものが水に溶ける量には、限度があることを理解している。 知③ものが水に溶ける量は水の温度や量、溶けるものによって違うこと、また、この性質を利用して、溶けているものを取り出すことができることを理解している。 知④ものの溶け方について、実験などの目的に応じて、器具や機器などを選択し、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。	思①ものの溶け方について、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 思②ものの溶け方について、実験などから得られた結果をもとに考察し、表現するなどして問題解決している。	態①ものの溶け方についての事物・現象に進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら問題解決しようとしている。 態②ものの溶け方について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

【児童の状況】

- ・全員が、日常生活で水にものを溶かす経験をしている。
- ・理科に興味・関心が高く、安全に配慮しながら、実験を行おうとする児童が多い。
- ・自然の事物・現象と既習の内容や生活経験を関係付けたり、自然の事物・現象の変化とそれに関わる要因を関係付けたりすることができる児童が7割いる。
- ・解決したい問題について、解決の方法を発想する際に、制御すべき要因と制御しない要因を区別しながら計画的に観察・実験などを行うことが考えられる児童が6割いる。
- ・予想と結果を関連付けながら、自分の考えを言葉で表現することに対して苦手意識をもっている児童が3割いる。

(6) 指導計画(全 15 時間)

次(時数)	学習内容	活動・指導形態	評価計画
第一次 (1時間)	・ものが水に「とける」とはどういうことなのか日常の場面から考える。 ・食塩の粒を水に入れて観察し、物の溶け方について問題を見いだす。 ・「とける」とはどういうことなのか考える。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
第二次 (9時間)	・水に溶けたものは、どうなったのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・電子天秤の使い方を確認する。 ・食塩とミョウバンのとかす前と後の重さを調べる。(実験1) ・食塩及びミョウバンをとかした液体を蒸発させて観察する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①] [態①]
	・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水にとけたものは、目には見えなくなっても、とけた液の中にあることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] ○[知①]
	・決まった量の水に溶けるものの量には、限りがあるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・メスシリンダーの使い方を知る。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・決まった量の水にとける食塩やミョウバンの量を調べる。(実験2) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・決まった量の水にとけるものの量には、限りがあり、ものによってとける量はちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知②]
	・水の量を増やすと、水に溶けるものの量はどのように変わるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 (P147～148)	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・水の量ととけるものの量の関係を調べる。(実験3) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の量を増やすと、水にとけるものの量も増え、水の量が2倍になると、とけるものの量も2倍になることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
	・水の温度を上げると、水に溶けるものの量はどのように変わるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
第三次 (4時間)	・水の温度ととけるものの量の関係を調べる。(実験4) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の温度を変化させたとき、とける量の変化のしかたは、とかすものによってちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] [知③]
	・どうすれば水にとかしたものを取り出せるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・ろ過のしかたを知る。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・水よう液を冷やしてとけているものを取り出せるか調べる。(実験5) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液は、冷やすとミョウバンを取り出すことができる。食塩水は、冷やしても食塩を取り出すことはできないことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[態①] [思②] [知③]
	・水溶液から水を蒸発させると、溶けているものを取り出せるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・実験用ガスコンロの使い方を確認する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①]
	・水よう液から水をじょう発させ、とけているものを取り出せるのか調べる。(実験6) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液も食塩水も、水をじょう発させると、とけていたものを取り出すことができることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
	まとめ (1時間)	・単元を振り返り、学習したことをまとめる。 ・たしかめよう ・活用しよう ・くらしとリンク	一斉・個別 ペア・グループ

●面接終了後、メモ用紙とともにクリアファイルに入れて提出してください。

『小学校理科』 模擬授業課題

(1) 日 時 令和7年1月〇日 第2校時(45分)

(2) 場 所 5年1組教室

(3) 学年・学級 第5学年 1組(24名)

使用教科書 わくわく理科5(啓林館)

(4) 単 元 名 もののとけ方

(5) 指導する児童の状況

【既習事項】

- ・形が変わっても、ものの重さが変わらないことや、物質によって同じ体積であっても重さが異なることを学習している。
- ・温度計や電子天秤などを用いた観察・実験を行っている。
- ・観察・実験から得られた結果を適切に記録するなどの技能を身に付けている。

【単元の目標】

ものが水に溶ける量やようすに着目して、水の温度や量などの条件を制御しながら、ものの溶け方の規則性を調べる活動を通して、それらについての理解をはかり、実験などに関する技能を身につけるとともに、おもに予想や仮説をもとに、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知①ものが水に溶けても、水とものを合わせた重さは変わらないことを理解している。 知②ものが水に溶ける量には、限度があることを理解している。 知③ものが水に溶ける量は水の温度や量、溶けるものによって違うこと、また、この性質を利用して、溶けているものを取り出すことができることを理解している。 知④ものの溶け方について、実験などの目的に応じて、器具や機器などを選択し、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。	思①ものの溶け方について、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 思②ものの溶け方について、実験などから得られた結果をもとに考察し、表現するなどして問題解決している。	態①ものの溶け方についての事物・現象に進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら問題解決しようとしている。 態②ものの溶け方について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

【児童の状況】

- ・全員が、日常生活で水にものを溶かす経験をしている。
- ・理科に興味・関心が高く、安全に配慮しながら、実験を行おうとする児童が多い。
- ・自然の事物・現象と既習の内容や生活経験を関係付けたり、自然の事物・現象の変化とそれに関わる要因を関係付けたりすることができる児童が7割いる。
- ・解決したい問題について、解決の方法を発想する際に、制御すべき要因と制御しない要因を区別しながら計画的に観察・実験などを行うことが考えられる児童が6割いる。
- ・予想と結果を関連付けながら、自分の考えを言葉で表現することに対して苦手意識をもっている児童が3割いる。

(6) 指導計画(全 15 時間)

次(時数)	学習内容	活動・指導形態	評価計画
第一次 (1時間)	・ものが水に「とける」とはどういうことなのか日常の場面から考える。 ・食塩の粒を水に入れて観察し、物の溶け方について問題を見いだす。 ・「とける」とはどういうことなのか考える。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
第二次 (9時間)	・水に溶けたものは、どうなったのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・電子天秤の使い方を確認する。 ・食塩とミョウバンのとがす前と後の重さを調べる。(実験1) ・食塩及びミョウバンをとがした液体を蒸発させて観察する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①] [態①]
	・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水にとけたものは、目には見えなくなっても、とけた液の中にあることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] ○[知①]
	・決まった量の水に溶けるものの量には、限りがあるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・メスシリンダーの使い方を知る。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・決まった量の水にとける食塩やミョウバンの量を調べる。(実験2) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・決まった量の水にとけるものの量には、限りがあり、ものによってとける量はちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知②]
	・水の量を増やすと、水に溶けるものの量はどのように変わるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・水の量ととけるものの量の関係を調べる。(実験3) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の量を増やすと、水にとけるものの量も増え、水の量が2倍になると、とけるものの量も2倍になることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
	・水の温度を上げると、水に溶けるものの量はどのように変わるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 (P149～150)	一斉・個別 ペア・グループ	[思①]
	・水の温度ととけるものの量の関係を調べる。(実験4) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・水の温度を変化させたとき、とける量の変化のしかたは、とかすものによってちがうことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	[思②] [知③]
第三次 (4時間)	・どうすれば水にとがしたものを取り出せるのか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・ろ過のしかたを知る。	一斉・個別 ペア・グループ	[思①] ○[知④]
	・水よう液を冷やしてとけているものを取り出せるか調べる。(実験5) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液は、冷やすとミョウバンを取り出すことができる。食塩水は、冷やしても食塩を取り出すことはできないことをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[態①] [思②] [知③]
	・水溶液から水を蒸発させると、溶けているものを取り出せるか考える。 ・仮説を基に実験方法を計画する。 ・実験用ガスコンロの使い方を確認する。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思①]
	・水よう液から水を蒸発させ、とけているものを取り出せるのか調べる。(実験6) ・実験結果から分かったことを話し合う。 ・ミョウバンの水よう液も食塩水も、水を蒸発させると、とけていたものを取り出すことができることをまとめる。	一斉・個別 ペア・グループ	○[思②] ○[知③]
まとめ (1時間)	・単元を振り返り、学習したことをまとめる。 ・たしかめよう ・活用しよう ・くらしとリンク	一斉・個別 ペア・グループ	○[態②]

●面接終了後、メモ用紙とともにクリアファイルに入れて提出してください。